

「歌の理」について

今回は、「歌」「ふで」「ふでさき」などの語句に焦点を当てて、「おふでさき」による自身の特徴づけについて考察する。まず、第一号の21から23は「おふでさき」の自己定義と見られる（右記）。また、他の箇所にはそれぞれ次のように歌われている。

これハかりひとなみやとハをもうなよ
 なんてもこれハ歌でせめきる（一28）
 たんへとふでにしらしてあるけれど
 さとりないのが神のざんねん（四47）
 だんへとふでにしらしてあるほどに
 はやく心にさとりとるよふ（四72）
 どのよふな事をゆうにもふでさきも
 月日の心さしすばかりで（六68）
 いまゝでにふでにつけたることハりが
 さあみゑてきた心いきむで（十二44）
 このはなしどふゆう事にをもうかな
 ふでのさきがなみへてきたなら（十七24）

一号21には、「おふでさき」を記す前提として、「この世」が「理の世界」であることが示されている。「この世」とは言語外の現実世界を指示しているが、言語体系にある種の論理を見出すとき、その体系で覆いきれない現実世界の複雑さ・豊穡さは「非合理」として捉えられる。ところが、「この世」が「理の世界」とは、その言語外の現実世界のほうに何らかの法則性があることを意味しており、その“言語外的な理”を和歌という言語形式で表現しようとしている。その際、その「理」は、歌で「せめる」（「筆先のせめ」と表現されている。「せめる」とは漢字では「責める」と読み取れるが、「責める」の古語「責む（せむ）」は「迫む（せむ）」と同源とされ、ここでの「せめる」は「言葉で迫る」、すなわち「理非曲直を明らかにする」という意味と解される。しかも、「口でも言わない」ともされて、和歌体の書き言葉として伝える旨が述べられている。

一号21の「歌のり」という語句は、十二号44で「筆につけたることハり」と言い換えられている。上記の歌群によれば、それは「月日の心」を発端とする「指図」であり、現実生活の上で「見えてくる」ものであり、見えた結果として「心勇む」ことにつながる。そして、そうした理の現れにおける重要な契機は、「悟る」（「悟りとる」）こととされる。「理」の知らせ方は、四号では「だんだんと」、十二号では「いままで」に表現されているが、「悟る」という人間の納得の度合いに応じてそれが「見えてくる」のであり、逆にいえば、その理が見えてくるように、あるいは悟ることができるよう、和歌で指図されているといえよう。

このように「おふでさき」自身を示している「歌」「ふで」「ふでさき」という語に着目すると、「おふでさき」を読む際のポイントが分かる。井筒豊子の和歌論によれば、和歌の「詞」（狭義のことば）は内的言語である「おもひ」の発露であり、「おもひ」と同じく心的現象である「情」（狭義のこころ）の現れとしての「余情」を伴う。「悟る」という機制は、そうした「余情」を読み取り、「おもひ／情」へと分け入ることも通じるであろう。なぜなら、そうした余情や内的言語も狭義の言語の

外にあり、和歌の特性を活かした“言語外的な理”の表現手段とみなされ得るからだ。

さて、「歌」「ふで」「ふでさき」などと語句だけに着目して一首ずつ抜き出して見てみたが、それらの歌は元々どのような和歌構造のなかに配置されているのか。ここでは一号の歌群を再掲して、その連関をみてみたい。一号21～23は28までで一つの意味のまとまりをなしていると考えられる。

このよふハリいでせめたるせかいなり
 なにかよろづを歌のりでせめ（一21）
 せめるとててざしするでハないほどに
 くちでもゆはんふでさきのせめ（一22）
 なにもかもちがハん事ハよけれども
 ちがいあるなら歌でしらす（一23）
 しらしたらあらハれでるハきのどくや
 いかなやまいも心からとて（一24）
 やまいとてせかいなみでハないほどに
 神のりいふくいまぞあらハす（一25）
 いまゝでも神のゆう事きかんから
 ぜひなくをもてあらハしたなり（一26）
 こらほどの神のざんねんでてるから
 いしやもくすりもこれハかなん（一27）
 これハかりひとなみやとハをもうなよ
 なんてもこれハ歌でせめきる（一28）

ここには「しりとり」の構造があり、各首が「歌の理」という一つのモチーフにまとめられている。まず、21の二句の「せめ」にはじまり、「せめ」が句末で繰り返され、それを22が初句で受けて、同様に「せめ」を句末としている。次に、23の「しらする」を24の「しらした」で受け、24の「やまい」を25の「やまい」で受け、そして25の「あらハす」を26が結句の「あらハした」で受けて流れを一旦区切り、27で句切れなしの歌で「神のざんねん」をストレートに伝えている。そして、28の前句において命令形で端的に指図し、句末で「せめきる」と歌って、これらの歌の一つの意味のまとまりを与えている。

ここで注目すべきことは、「歌でしらする」理というものが、「やまい」が現れることと関連づけられていることだ。和歌構造の「情—余情」あるいは「おもひ—詞」といった機能は、井筒においては「言語フィールド」や「意識フィールド」の上で捉えられていたが、「おふでさき」では、それを読み取る者の身体性（「やまい」）とも関連づけられている。言語外の「余情」は「やまい」としても現出するともいえるかもしれない。それが「悟り」に深く関わることは言うまでもない。「やまい」は「心から」とされるが、その「心」とは「ちがいがある」あるいは「神のゆう事きかん」人間の心と、「神の立腹」としての神の心という二通りの心を一語にして表現していると読み取れる。ただし、「詞／余情」として現出してくる「心地—自照—心的現象」という動勢は、当然のことながら「おふでさき」では親神の心的機制を表現しようとするものである。「神のりいふく」「神のざんねん」といった神の属性としての感情表現が人間の経験するものとは次元を異にすることは銘記されなければならない。